溺れる、連鎖

miz

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
溺れる、連鎖

【Ｎコード】
Ｎ３５２０Ｘ

【作者名】
ｍｉｚ

【あらすじ】
はじめに言っておきますが今からお話しすることは誰が犯人だとか、どうしてこのようなことが起こったのかを供述するわけではありません。ましてや僕の罪を軽くしたいわけでもありません。ただ真相をお話しするだけです。
”××山荘殺人事件”の犯人として捕まった槙は三つの事件と三人の人間について語りだす。関連性のない事件だと思われていた三つの殺人事件はやがて連鎖し、真相が見えてくる―――

始まりの事件はどちら？

7月29日

これはこれは。わざわざお出でいただきありがとうございます。まあお出でいただかなければこうして会えないのですからショウガナイですよね。

あれ？笑えませんか。ちょっとしたジョークだったのですが……。

そんな恐い顔しないで下さい。男前が台なしですよ。

……もしかして僕のこと覚えていませんか？ああ、名前ですか。はじめてあなたと出会ったときは違う名前を名乗っていましたものね。

槙（まき）、これは偽名です。

怒っているのですか。でも僕がこうなることはあなたが一番分かっていたはずだ。そうでしょ？でなければ僕はあなたをこうしてお呼び立てしませんよ。

さあ本題です。僕があなたを呼んだのは”××山荘殺人事件”についての真相をお話しようと思ったからです。真相。そう、真相。真実ですよ。

はじめに言っておきますが今からお話しすることは誰が犯人だとか、どうしてこのようなことが起こったのか、つまり動機を供述するためではありませんし、ましてや僕の罪を軽くしたいわけでもありません。変な勘違いはしないで下さい。ただあなたの胸に留めておいてくれればいいのです。間違っても口外はしないで下さいね。

だったらなぜ話すのか。そうですね。数週間前に”××山荘殺人事件”の唯一の生き残りの青年が自殺したと新聞で読みましてね。彼がいなくなったのであれば黙っておく必要はないと思ったからです。でなければ彼が浮かばれないと思ったからです。

僕は彼を愛していましたからね。ゲイ？いえ、それとはちょっと違います。そういう愛ではありません。いやもうそれはいいでしょう愛について談義したいわけではありません。

しかし、暑いですね。あなたと出会ったころを思い出します。あなたと出会ったころもこんな蒸し暑いときでしたね……。
そうだ。今から思えば”××山荘殺人事件”は１２年前に起きた”××通り魔連続殺害事件”からはじまったように僕は思います。つまり僕とあなたが出会った、あの事件です。
”××通り魔連続殺害事件”の詳細を教えていただけませんか？あの頃交番勤務だったあなたが今はこうして立派な刑事になったのです。以前よりかは事件の詳細が分かったのではありませんか？もちろん話せるところだけで結構です。

お願いします。

"××通り魔連続殺害事件"

7月19日

夕日が射しこむ学校の屋上が好きだ。フェンスにもたれ足を投げ出し目をつむり何も考えずただ風を感じる。

小さく風が吹くと長い前髪が揺れた。たぶん他人が見たらうっとうしい髪型なんだろう。クラスメートに鷲掴みにされ「うっとうしい」と言われた。そういうヘアースタイルが好きなのかと聞かれればそういうわけじゃない。どうでもいいのだ。

目をつむっているとうるさいセミの鳴き声と先ほどまで僕を殴っていたクラスメートたちの話し声が聞こえた。

――――なぁあと何人殺されると思う？

――――オレ隣に住んでるヤツが怪しいと思ってるんだ。

楽しそうに話すヤツ。推理をしだすヤツ。彼らが話しているのはこの町で起きた連続殺害事件のことだ。この一ヵ月で二人もの女性が殺された。こんな小さな田舎町で殺害事件が起こるだなんて誰も想像していなかっただろう。もちろん僕もそのうちの一人なのだが。

下校時刻ぎりぎりまで屋上で過ごしてから帰路に着くようにしている。クラスメートたちに会うのも煩わしいし家にいるのも好きではなかった。帰宅路を歩いているといつもなら人の気配がする住宅街も殺害事件が起こってからは随分と静かになってしまった。みんなが助け合って生きているような温かい町だったのに寂しいもんだな、とレクイエムのように鼻歌を歌った。

短い住宅街を抜けると小さな駅があり、そこは打って変わり警察官やマスコミが増えていた。今まで人の出入りがなかったラーメン屋も満員になるほどだ。

その横を通りすぎると改札の隣に交番があるのだがいつもの年老いた警察官ではなく若い男が立っていた。今回のことで若い警察官に交代したのだろうか、とつい見すぎてしまったのか若い警察官は「

おかえり」と笑いかけた。嘘っぽい笑顔だった。だけどこういう人たのめに”好青年”という言葉があるのだろうと理解した。小さくお時儀をしてすぐさま過ぎ去った。

「一ヵ月も経つのに犯人が捕まらないなんて」
母は怒るように新聞を弾いた。テーブルでご飯を食べる僕、その前で話す母。いつもの光景だった。
「別にこの町でなくても仕事はできるし引っ越そうか？」
母の話はつづく。返事もしていないのに。疑問形で投げかけてくるくせに母は返事を待たず話しをつづける。父が母と離婚を決めたのもなんとなく理解できた。話しだすと止まらない。自分が納得できるまで話しはどんどんと進んでいく。どんどんどんどん。取り残される。
僕たちと母のあいだにできた距離は少しずつだけどでも確実に大きな大きなものになっていき、そして修復不可能なまでの距離になってしまったのだ。

7月20日
顔を殴られた。体を殴られたり蹴られたりすることはよくあったが顔は初めてだった。容赦がなくなっていくんだな、と他人事のようにぼんやりと考えていた。屋上で過ごす放課後、唇の端をさすりながら溜息をついた。
このもたれ掛かっているフェンスが壊れこのまま一緒に落ちてしまったらどうなってしまうのだろう。落っこちる自分を想像する。まず頭が割れて体が地面に叩きつけられ骨が砕け肉が飛び散るのだろうか。想像するとぞくぞくした。
———ガタン、と扉の開く音がしたので咄嗟に身構えた。開いた扉に目をやると同じクラスの女子が脅えるようにこちらを見ていた。この時間に屋上へくるヤツは今までいなかったので少し驚いた。

「あっ……　ごめんなさい」
彼女はか細い声でつぶやいた。
「梶（かじ）……く、ん」
居座る気なのか、と言うように睨みつけると彼女は泣き腫らした目をしていた。そういえば最近クラスの女子から無視をされていたことを思い出した。ただのケンカだと思っていたがケンカにしては期間が長いような気もした。
「唇……　切れてるよ」
彼女は僕の側にきて「はい」、とハンカチを差し出したが目をそらした。無言で立ち上がりその場を去ろうとしたが腕を掴まれ制止された。
「待って……！　……あたし、あたし、」
彼女は必死なのか腕が痛くなるほど力いっぱい握りしめていた。そして溜まっていたものを全て吐き出すようにまくしたてた。
「しにっ　死にたいんだっ　梶くんは、どうして死ななかったの！？」
”どうして死ななかったの”その言葉を聞いて彼女は僕を探してここまで来たのだと分かった。彼女はたぶん、僕の手首に残る傷跡のことを言っているのだろう。
彼女の想像通り、僕は一度だけ自分の手首を切ったことがある。学校に馴染めない自分。いつのまにか始まった暴力。話はじめると止まらない母。躊躇うことなく簡単に手首を切った。だけど切った途端なんだか違う、と感じた。死にたいとは少し違う。でもそれが何なのかは分からなかった。ただ思った以上に興奮していたようで深く切ったつもりはなかったが血が止まらずどくどくと流れつづけていた。その流れる血をながめながら心の奥底で「失敗した」と囁く冷静な自分がいた。
失敗したのは深さではなく母だった。案の定病院に運ばれた僕の隣で母は狂うほど泣き叫んでいた。「どうして」と母はもちろん医者にも聞かれた。もとっもらしい嘘をついた。「父がいなくて寂しか

った」半分ウソで半分ホントだ。
「なに？お前死にたいの？」
彼女は深刻そうな顔をして頷くので鼻で笑ってしまった。
「クラスの女子に無視されてるだけで？くだらねぇ」
「……でも、でも梶くんも死にたいからリスカしたんでしょう？」
「はっ　お前と一緒にすんな」
そう吐き捨てて屋上を後にした。
階段を下りている途中、母を思い出していた。この町に引っ越してきたころ隣に住むおばさんは「困ったことがあったら言ってね」と言った。優しくて親切そうな人だった。だけど母は何が気に食わなかったのか「お節介ね」とおばさんが帰った途端に冷たい声で吐き捨てた。そのときの母の声と彼女に吐き捨てた僕の声が似ていたような気がした。

学校を出ると夕日が沈みかけていた。綺麗なオレンジ色をした空が黒く塗りつぶされていくような不気味な空だった。
住宅街にさし掛かる前に木々や雑草が生い茂った薄暗い場所がある。昨日と同じように鼻歌を歌いながら歩いているとそこからかさかさという小さな音とともに僅かに雑草が揺れていた。風か何かだろうと思っていたのだがその音と揺れはだんだんと大きなものとなっていった。
すると突然生い茂った雑草の中から少し太ったガタイのいい男が息を切らしながら現れた。顔は見えなかったが少し慌てているようにも見えた。反射的に物陰に隠れその様子を見ていると男はそのまま僕の存在に気づかず逆の方向へと歩いて行った。
その場所から動くことが出来ず心臓はどきどきと早く脈打っていた。心のなかで「もしかして」という予感があったからだ。
———もしかして。もしかして。もしかして。
男が現れた草むらへ近寄って見ると生い茂った草むらに男が通ったであろう道が微妙に出来あがっていた。辺りを見回し誰もいないこ

とを確認してから草むらへ一歩、足を踏み入れた。
———もしかして。もしかして。もしかして。
足を一歩一歩進めるたび自分の口角が上がっていることに気がついていた。だけど進むことに夢中になっていて「どうして」という気持ちはなかった。
歩みを止めず男が通ったことで出来た道を歩いた。草が踏まれ青臭い独特の臭いがした。一歩、一歩、いつの間にか早歩きになっていた。セミがうるさく鳴きつづけ体から汗が流れ落ちるのを感じる。無造作に汗を拭っているとぴしゃっと何かが跳ねる音がした。
真っ赤、そんな言葉が頭に思い浮かんだ。
女の人が仰向けになって倒れている。腹部からは赤黒い血だと思われるものが飛び散っていた。ああ、残酷。残酷だ。もう少しで腹の中が見えてしまいそうなほどへこんでしまっている。息が荒くなった。
咄嗟に膝をつき鞄で下半身を隠した。自分の息遣いが真横で聞こえる。はぁ。はぁ。はぁ。はぁ。そっと鞄を持ち上げ下半身を確認した。
———興奮している……。
何で。何で。突然視界がぐにゃりと曲がり倒れそうになる体をなんとか堪えた。死体と思われる女性の唇が目に入った。口紅を塗っている。真っ赤な口紅。でもそれは綺麗に塗られているものではなく興奮したように力強く、唇からはみ出してしまっていた。顎までつづく赤い口紅。自分の湿った指が女の人の唇に伸びていくのが見える。はぁ。はぁ。はぁ。はぁ。うっと吐き気襲った。慌ててその場から離れ吐かないよう手で口を押さえながら走った。走って走って走っているあいだも死体のことを考えていた。
———死んでる。死んでる。死んでる。
人が死んでる。
元いた道に戻ったあともそのまま走りつづけた。
彼女は刺されていた。何度も何度も刺され腹がへこみ中身が見えそ

うになるまで。その場にうずくまりとうとう吐いた。そして一瞬で視界が真っ黒になり消えてしまった。

誰かの声がした。でもだんだんと遠くなっていく。意識が遠くなっていく。

助けて、誰か。ここは暗くて恐い。

三人目の死体

階段を上っている。辺りは真っ暗なのに黒い階段を上っているのが分かる。ああ、夢だ。これは夢だ。夢をみている。夢のなかで僕は疲れ切っていて上りたくないのにどうしてもこの階段を上らなくてはいけない気がしている。はぁ。はぁ。はぁ。はぁ。真横で自分の息づかいが聞こえる。しばらく上りつづけていると踊り場が見えた。でも階段は螺旋階段になっているようでまだまだ上へとつづいている。

踊り場に到着すると膝を抱えしゃがみ込んだ。すると横から扉が開くような小さな光が射しこみまぶしく照らしはじめた。その小さな光をたどり中を覗きこむと、僕がいた。小学生の僕と父。以前住んでいた家のテーブルに向かい合わせになり座っていた。俯く僕にそれを見据える父。見たことのある光景だった———

「僕は父さんといたい」

「お母さんが寂しがるよ。それに一緒に暮さないだけでいつでも会える。」

そう言って父は笑った。

だけど父は、母と別れてから一度も会いに来ることはかった。恨みはしない。父は普段から嘘つきだった。

子供は嘘つきだと言った大人は誰なんだろう。大人だって子供と同じくらい嘘つきだ。違うのは嘘がうまくてすっかり騙されてしまうことだ。

目が覚める感覚が嫌いだ。頭がぼんやりとしてじわじわとこれが現実だと突きつけられてるような気がするからだ。今までみていた夢が幸せなものだったとは言わない。けれど現実よりもずっとずっと幸せだった。

「あ、目が覚めた？」

「……」
見慣れない天井、見慣れない人が覗きこんでくる。起き上がろうとするとその人は「横になってたほうがいいよ」と嘘っぽい笑顔で言った。
たしかこの人は交番の前にいた警察官だ。覚えてしまうような目立つ顔立ちはしていないがこの笑顔で分かった。
「君、道端に倒れてたんだよ。病院に連絡しようと思ってたけど……平気？」
「……平気です」
「じゃあ冷たい飲み物持ってくるね」
そう言いながら彼は奥の部屋へと消えた。
ここは交番だろうか。窓に目を向けると外はすっかり暗くなっていた。だけどセミは相変わらずうるさく鳴きつづけていた。
耳に残るセミの鳴き声、汗が流れる感覚。また呼吸が荒くなりそうになるのを堪え大きく溜息をついて落ち着かせた。
「麦茶しかないんだけどいいかな？」
警察官は僕の側に座りコップいっぱいに注いだ麦茶を差し出した。
それを受け取り休むことなく一気に飲み干した。
「熱中症かな？倒れてたときすごい汗だったんだ。」
彼は遠慮なしに額に手を当てた。人に触れられるのが苦手だ。だけど振り払うのも躊躇われたのでガマンした。
「君、名前は？」
「……梶です……」
「じゃあ梶くん。家に電話して親御さんに迎えに来てもらおうか？」
「いえ……、結構です。」
「……でも」
「僕、片親なので心配かけたくないんです。」
こういうと大人は「しまった」という顔をして引いてくれるのを心得ていた。この警察官もまた同じだった。申し訳なさそうな顔をして「そっか」とつぶやいた。

この人は両親がいて兄弟がいてきっと幸せな家庭に育ったのだろう。
僕はそういうニオイに敏感だった。両親がいる人は本当に幸せなのかそれとも幸せそうにみえたのかは分からないが僕にはない何かを持っているような気がしたのだ。
「じゃあ送って行くよ。最近じゃこの辺も危ないしね。」
送って行くという申し出を断ったが彼はそろそろ巡回の時間だと言ってパトカーに押しこまれた。
車に乗るのは何年ぶりだろう。父も母も免許は持っていたようだが車は持っていなかった。最後に乗ったのは救急車だ。そのあいだ意識は朦朧としていたのでよく覚えていない。
窓の外をながめていると何を思ったのかは分からないが警察官は窓を開けてくれた。長い前髪が激しく揺れて少し痛かった。
「梶くんはかっこいいね。学校でモテるでしょ？」
「……いえ、別に。」
「何年生？」
「高二です」
「一番いい時期だねー」
何をとって一番いい時期だと言っているのかは分からなかった。けれどこの人にとって高校二年生が一番楽しい時期だったということは分かった。曖昧に返事をして窓の外をながめつづけた。
家の近くに止めてもらいお礼を言ってパトカーが見えなくなるまで見送った。そのあいだ父のことを考えていた。嘘っぽく笑う彼は父に似ていたのだ。

家に帰るとすぐにあるだけの新聞を集めた。もちろんこの町で起こっている殺害事件の記事を読むためだ。
自分の部屋に戻り新聞を広げた。ほとんどが一面になっていた。
殺害がはじまったのは6月23日。一人目の女性が殺された日だ。
腹部を何度も刺されたことによる外傷性ショックが原因で死亡。動機は不明。

二人目の女性が殺されたのは7月7日。一人目の女性が殺されてからちょうど二週間後に同じ殺害方法で失血死が原因で死亡。こちらも動機不明。
やはり腹を何度も刺されている。だけど僕があの死体を見たとき、一番最初に目に入ったのは口紅だった。それなのにそのことは一切書かれていなかった。
携帯電話をポケットから取り出し日付を確認すると今日は7月２０日。二人目の女性が殺されてちょうど二週間後で殺害方法も同じだ。三人目の女性だけに塗っただけかもしれないし模倣犯という可能性もある。違うのだろうか。僕が見たあの男はこの事件の犯人ではないのだろうか。
ベッドに横になり目をつむると死んでいた女の人を思い出してしまった。
「眠れねぇー…」

7月21日
朝、目を覚ますとすぐに朝刊を取りにポストへ向かった。そして新聞を読みながらニュースを見ていたが三人目の女性については何も報道されていなかった。
まだ見つかっていないのか。内心ほっとしている自分がいて慌てて打ち消した。
母が朝食にと用意したトーストを齧る。食欲がなかった。
眠っているときも夢をみた。あの階段を上っている夢だ。夢で疲れ果ててしまい現実でもうまく力がはいらなかった。

全ての授業が終わるとクラスメートたちの暴力がはじまる。日課のようなものだった。授業が終わり屋上へ向かおうとカバンを持ちあげると、いつもそのタイミングでやってくる。だけど今日は少し違うようだった。カバンを持ちあげると昨日屋上にやって来た女子が

駆け寄って来たのだ。
「梶くん……　あの、あの、」
「小川(おがわ)さん、梶くんに急ぎの用？オレたち梶くんに急ぎの用があるからまた今度ね。」
そう思ったのは一瞬のことだったが。ほんの少し早くやってきたのが昨日の女子ってだけでクラスメートたちは変わらずにやってきた。昨日の女子はクラスメートのひとりに軽く押しのけられよろめいていた。
「もしかしてお前、小川さんとつき合ってんの？」
ひとりが甲高く笑いだすとみんなが一斉に笑いだした。下品な笑いかたに虫唾が走った。昨日の女子は俯いたまま青ざめていた。
いつのまにか。
本当にいつのまにか真ん前にいたクラスメートの頬に自分の拳がめり込むのが見えた。殴っていたのだ。いつのまにか、なんてこと本当にあるんだ、と心のなかにいる冷静な自分がささやく。クラスメートの頬を殴ったあと自分の拳をながめた。痛い。でも外傷はなかった。
クラスメートは倒れこんでいた。すると突然視界がぐにゃりと曲がった。曲がってしまった視界が少しずつ元に戻ると同時に隣にいたもうひとりのクラスメートに殴られたことを思い出していた。
「ってぇー…」
「梶くん！！血！」
昨日の女子が驚いた様子で僕を見下ろしていた。
血生臭いにおいがする。痛みがあるところに手をやるとべったりと血がついた。鼻血だ。クラスメートたちは倒れこんでいたクラスメートを抱え教室を出て行くところだった。
今日はこれで終わりかと肩を撫でおろした。
昨日の女子は「血まみれだよぉ」と泣いているのではないかと思うほど震えた声でハンカチを差し出した。受け取らず立ち上がることも出来ずにいると女子は無理矢理口元を拭った。振り払う気力もな

く目をそらしたまま窓の外に見える夕日をながめていた。
いつのまにか教室には誰もいなくなっていて聞こえるのはセミのうるさい鳴き声と部活動を行っている掛け声。
「……名前、なんていうんだっけ？」
「……小川です……小川真樹（おがわまき）……」
そして小川がすすり泣く声だった。

やっと鼻血が止まり学校を出たときには夕日は傾き小川を家まで送り届けたころには辺りは薄暗くなっていた。
少し遠回りになったが死体がある雑木林へ向かった。死体はまだあるのだろうか、という興味だった。今朝は報道されていなかったのだ。まだあるはずだ。
雑木林にたどり着くと昨日と同じように辺りに誰もいないかを確認してから一歩を踏み出した。中に入ると辺りはよりいっそう真っ暗でほぼ何も見えず手さぐりで前へ進んだ。進んで進んでいくと何かを蹴ってしまったような感覚があった。
ポケットからそっと携帯を取り出し待ち受け画面を開くと明かりが点った。その小さな明かりで足下を確認すると足が投げ出されたようなかたちで横たわっていた。その場にしゃがみ込み足をながめてみるとストッキングは破れてしまっていた。だけど細くて綺麗な足だった。明かりを移動させると長い脚がつづき赤く染まった腹部、胸部、首まで照らしたところで携帯を閉じた。顔は見れなかった。
真っ暗な中、僕と死体と二人きり。二人？一人だろうか。
不意に涙が溢れだしていた。二、三度制服の裾で拭ったが涙が止まる気配はない。せめて声が漏れないよう腕に噛みつき涙を流した。流れる。流れる。流れる。今日は体中の水分がこれでもかっていうくらい流れていってしまったように思う。それでも僕は干からびて死んでしまうことはないのだ。

死体の臭い

駅前を歩いていると名前を呼ばれる声がした。声の主を探すと交番の前で手を振っている警察官がいる。どうも、というように小さく頭を下げると笑顔で手招きをされ顔が少し引き攣った。なんだかこの人は苦手だった。苦手な大よその要因は父に似ているからだろう。お時儀をしてしまった以上無視するのは躊躇われた。

彼の近くに行くと大げさに「じゃーん」と言いながら手を前に差し出した。手の上にはココアボールという小さなお菓子のケースが乗っている。

「え？……あの……」

「ココアボール嫌いだった？」

「いえ、じゃなくて……」

「じゃああげる。昼間おばあちゃんにいっぱい貰ったからさ。」

「……はぁ……ありがとうございます……」

ココアボールを受け取り制服のポケットに入れた。「それじゃあ」と去ろうとしたが昨日みた新聞のことを思い出した。

「あの、この町で」

「梶くん！！」

突然話しを遮られ何事かと思ったが鼻からどろりとした感触がした。ああ、また鼻血かと確認しようとすると警察官はすばやく自分の腕の袖で僕の鼻を拭い押さえつけた。あまりにも早く自然な行動に驚いてしまって言葉がでなかった。まだ二度しか会ったことのない人に咄嗟とはいえ嫌な顔ひとつせずむしろ心配そうに自分の制服で拭うなんて。僕ならきっとできない。彼は警察官だから、とも思えなかった。

警察官は慌てながら僕を椅子に座らせ袖をタオルへと代え押さえつづけた。

「もしかして殴られた？」

「え……？」
「鼻の横にアザができてきた……」
「ええ……、まぁケンカです。」
「そっか」と警察官は小さくつぶやきほほ笑んだ。
確かに殴られてからずっと痛みはあった。だけどアザができるほど強く殴られているとは思わなかった。誰にでも見えるところにアザをつくって僕に対する”暴力”を知られてもいいのだろうか、と溜息をついた。少なくともこの警察官は察したはずだ。知られたくないわけではないが知ってほしいわけでもない。
母が知るとあのときのように泣き叫び僕の高校生活を間違いなくめちゃくちゃにする。家族を壊したように。母が悪気がないのは分かっている。分かっているから恨めずにいるのだ。
警察官に身をまかせていると足下に何かが触れる気配がして悪寒が走った。わっと足下を見ると猫が人懐っこく足にじゃれついてきていた。
「猫、嫌い？」
「いえ……、別に。驚いただけです。」
「マキっていうんだ」
「え？」
「猫の名前」
「飼ってるんですか？」
「まさか。ミルクを飲みにくるだけ。」
警察官はタオルをそっと離すと「止まった。止まった。」と安心するように笑い奥の部屋へと消えた。
僕は足下でじゃれながら寝転がっている猫を見下ろした。猫は笑うような表情で幸せそうにしていた。軽く蹴ってみたがそれにも気づかずごろごろと喉を鳴らした。
遊んでいると思っているのだろうか。幸せなヤツ。
警察官が戻ってくると両手に平べったい皿とマグカップを持っていた。それは予想どおり皿を猫の前に置きカップは僕に差し出した。

ミルクだった。猫と同じ。受け取らずにいると彼は「嫌い？」と訪ねた。
「……名前……聞いてませんでした」
「ああ、そうだね。俺は志紀と言います。よろしく。」
そう言って彼はカップを持っていない手を差し出した。だけど僕はその手を握らずカップを受け取った。ミルクを飲むふりをする。顔は見れなかった。きっと屈託なく笑い温かい手をしているのだろう。握れない。どうしても。

7月22日
「カウンセリング受ける人は今日までだからねー」
先生がそう言うと女子からは落胆の声が聞こえた。
事件が始まってから学校では保健室にカウンセラーが導入された。女子が「カウンセラーはイケメンだ」と話しているのを聞いたことがある。本来のカウンセリングという目的を忘れ雑談に行く女子が多かったのだ。
クラスの担任が出ていくのを見計ったかのように「かーじくん」と笑いながらクラスメートたちに囲まれた。
明日から夏休みだというのにクラスメートたちは最後の最後まで暴力を振るった。「しばらくは殴れないからな」と笑いいつも以上に殴られていたような気がする。だけどしばらく暴力から解放されるのだと思ったら少しほっとできた。
血生臭いニオイとともに屋上でぼんやりとしていると小川がやってきた。いつものように目に涙をいっぱい溜めていた。
「ひどい……」
「……」
「このままだと酷くなる一方だよ」
「……どうしろっての」
「わかんない」

小川はとうとう泣きだした。
わからない、そう小川が分かるはずがない。彼女もクラスの女子から無視されつづけている。そんなヤツに暴力を止めることなんて出来るはずがない。
小川は、僕のために泣いているかのように涙を流す。でも本当は自分と僕を重ね合わせ泣いているのだ。無力な自分。カッコ悪くて誰にも助けを求められない自分。惨めな自分。どうすることも出来ない自分に涙を流している。
「帰ろう」
小川は小さく頷いた。

交番の前を通ると警察官の姿はなかった。巡回の時間だろうかと横切ろうとすると猫の小さな鳴き声が聞こえた。辺りを見回しても猫の姿はない。ふと交番の中をのぞきこむと猫がこちらを見て座っていた。
扉を開くと足下にすり寄り高い声でにゃーと鳴いた。ミルクが欲しいのだろうか。昨日もこのくらいの時間にミルクを飲みに来ていた。すぐ近くにあるスーパーに行き小さな紙パックの牛乳を買うと急いで交番へ戻った。床に猫用のものだと思われる器があったのでそこに牛乳を注いでやると猫はゆっくりと牛乳を舐めはじめた。
猫は犬と違って上品に舐めるのだな、とぼんやりとながめていた。
母と父が離婚をする前に犬を飼っていた。白い犬だった。その犬は僕と父によく懐き賢い犬だった。大好きで大好きでずっと傍にいたかったが父が引き取り会えなくなってしまった。
今から思えば父にとって僕は犬よりも価値のない存在だったのだろうか。
牛乳を舐める猫の背中を撫でると少しビクリとしたが器から口を離すことなく舐めつづけていた。少し汚かったが白い毛並みで昔飼っていた犬と似ていた。温かかった。撫でつづける手が震える。
「梶くん」

突然の声に驚き振り向くとそこには志紀さんがいた。
「ごめん。驚かした？」
「いえ……」
「……お、マキにミルクやってくれたんだ。」
「はい、すみません……。」
「ううん、ありがとう。」
頭をがしがしと力強く撫でられていると志紀さんの後ろにもうひとり警察官がいることに気がついた。彼と同じくらいの若い警察官だったが冷たい目をする男だった。
「帰ります」
「え、あっちょ」
志紀さんは僕を呼びとめようとしていたが気づかないふりをしてその場を去った。
走っているとポケットに違和感を感じた。手を入れてみるとココアボールと書かれた小さな箱が出てきた。そういえば昨日志紀さんから貰ったお菓子をそのままにしていた。
文字の下で鳥のようなキャラクターがウインクをしてこちらをみていた。
「変なの」
もう一度ポケットにつっこんだ。

8月

夏休みに入ってから毎日のように死体のある場所に通った。死体はだんだんと腐敗が進み鼻を押さえても分かるほどの強烈な臭いとなっていた。服にもその臭いが染みついているような気がした。
目を覚ますと手のなかにあるTシャツをぎゅっと握りしめていた。
相変わらず階段に上りつづけている夢をみている。その夢をみた日の朝は必ず汗でびっしょりになっていた。上に昇るにつれてなんだか僕が僕じゃなくなっていくような気がした。

あの階段はどこにつづいているのだろうか。
「ちょっと髪伸びすぎなんじゃない？」
「……」
「お金あげるから切っておいでよ」
母と朝食をとっていると前髪を摘まれそう言われた。財布から一万円札を取り出し机の上に置いた。
「学生は夏休みがあるからいいよねー」
母は話しをつづけながら玄関へ向かった。テーブルに置いた一万円札をポケットに入れドアが閉まる音に耳を傾ける。ドアの閉まる音がすると新聞へと手を伸ばし、この町で起こっている事件の記事を探した。事件の記事を探し出すと綺麗に切り取ってノートに貼りつける。それが毎日の日課となっていた。見出しに”××通り魔連続殺害事件”と書かれていた。以前のものよりも文字はだんだんと小さなものになっていた。今まで貼りつけていた記事をぺらぺらとめくりながらながめていると、ふと思いたち母の部屋へ向かった。
母の部屋の扉を開くと化粧品のどくとくのニオイがした。真っすぐ化粧台へ行き化粧品が放りこまれている引き出しを開けた。こんなに使うのかと思うくらいの口紅がぎっしりと詰めこまれていた。
そのなかから死体の唇に塗られていたような赤色のものを探しだした。見た目は違うものの赤色の口紅はたくさんあった。ひとつを適当に選び蓋をあけ下部を回すと口紅は真っ赤な姿を表した。
化粧台の前に立ち自分の姿を映す。口紅をそっと自分の唇にあて、そのまま唇の形をなぞる。死体は唇から外れ顎あたりまで塗られていた。再現するように力強く顎のあたりまで塗ってみると力が強すぎたのか口紅は根元から折れて落ちてしまった。
鏡に映る自分。死んでいた女の人が重ね見えた。
家にインターホンの音が鳴り響き、はっとなり我に返るようだった。
———僕は何をしているのだろう。
慌てて洗面台へと走り顔を洗った。洗って洗って鏡を覗きこむが真っ赤な口紅はとれない。何度も何度も石鹸をつけて洗い何度も何度

もタオルで拭き取ると跡は残っているような気はしたがなんとか流れ落ち、大きく溜息をついた。

駅前には警察官とマスコミの姿しかなくなっていた。学生が夏休みに入ったことで町の人たちは事件から逃げるよう田舎に帰ったまま戻ることがなかったのだ。

交番の前を通ると志紀さんがいた。夏休みに入ってからは猫にミルクをやるため毎日のように交番へ通った。もちろん志紀さんしかいないときだけにしている。

「おはよう」

彼はいつもの笑顔で笑った。志紀さんはこちらが恥ずかしくなるほど飛びきりの笑顔で笑う。ときどき疲れてしまわないのだろうかと考えることもあるが毎日その笑顔は絶えることがなく父とは違う本物の笑顔なんだと思えるようになっていた。

「おはようございます」

「今日は早いね」

「はい。髪を切りにいこうと思いまして。」

「そうなんだ。……あ、俺が切ってあげようか？」

「えっ　いえ……」

「俺こうみえても美容師目指してたんだよ」

彼は悪戯っぽく笑い美容師を目指していたことを話してくれた。家族に大反対されて警察官になったこと。彼の家族は警察一家であること。現在は家族と離れ暮らしていること。困ったように志紀さんは話していたが幸せそうだった。やはり彼は幸せな家庭に育ったのだ。僕が憧れる家庭がそこにはあった。

「じゃあ僕があなたのお客さん第一号になります」

「おっいいね」

彼は嬉しそうに笑いいつものように僕の髪をがしがしと撫でた。

「梶くん？」

名前を呼ばれ振り向くと白い日傘をさし淡い水色のワンピースを着

た女子がこちら見ていた。彼女はすらりとしていてワンピースがよく似合っていた。
こんな女の知り合いがいただろうかとしばらく見つめていると、その女は俯いてしまった。俯いたことでやっと小川だと気がついた。いつも俯き加減で話す彼女は制服を着ているととても暗いイメージだったが印象が違ってみえた。私服の小川はどこかのお嬢様のようにとても綺麗だったのだ。
「小川……」
彼女は微かに笑い僕を待つようにして去る気配がなかった。仕方なく志紀さんに別れを告げ小川につき合うこにした。

近くの喫茶店に入り席に着いた途端彼女は独り言のように「暑いね」とつぶやいた。長い髪を耳にかけハンカチで汗を拭っていた。そのひとつひとつの動作がとても綺麗だった。
「僕に何か用だった？」
「え……　あ、用ってわけじゃないけど」
彼女はもごもごと話し暑さで赤くなった顔を俯むけた。
「あたし、梶くんと一度ちゃんと話してみたくて……」
「何を？」
「……わかんない、けど……」
小川は困った顔をしていた。しばらく沈黙がつづいたあと注文していたアイスコーヒーが運ばれてきた。小川は運ばれてきたアイスコーヒーが入ったグラスを何をすることもなくじっと見つめていた。
「……梶くんは、自分がイジメられてる理由を知ってるの？」
僕もつられるようにしてじっとグラスを見つめていたようで小川の声に少し驚いた。そして今まで気づかなかったが小川はとても綺麗な話し方をする人だ、と童話を聞くように聞き入ってしまった。
「……いや、知らない。気にいらないんだろ。」
「違うよ」
彼女は理由を知っているかのようにきっぱり否定する。

「梶くんがかっこいいからだよ」
「は……？」
突拍子もない答えだったので変な顔をしてしまったのだろうか彼女はくすくすと笑った。小さく笑う表情も女性らしくとても綺麗だった。
「なんてね。……半分嘘で半分本当。」
「……」
僕が黙っていると彼女は慌ててごめんね、と手を合わせた。
「繭がね、梶くんのこと好きだからだよ。」
”マユ”とは僕の隣の席で最近まで小川が仲よくしていた女子だったと思う。小川はまだ冗談をつづけているのかと思っていたがだんだんと真剣な顔つきになっていった。
「でね、繭のことを永倉くんが好きなんだ……。」
彼女は遠くをみるように「言ってる意味わかるよね」とストローでコーヒーをかき混ぜた。
”ナガクラ”とは中心となって僕を殴っていたヤツ。僕が殴ってしまったヤツ。僕の知らないところでそんなことが起こっていたなんて気づきもしなかった。友達がひとりもいない僕が気づけるはずもなかったが知りたくもなかった。
そんなくだらねぇこと。

その夜、何も考えたくはなかった。だけど小川に聞いた話しが頭のなかでぐるぐると回りどうしようもない思いを持て余していた。ベッドに蹲り、目を閉じた。
目を閉じた途端あの死体のことが頭に浮かびベッドから飛びおりクローゼットに仕舞っていたくしゃくしゃのTシャツを取りだした。そのTシャツに顔を埋め思い切り息を吸いこんだ。僕のニオイと微かに臭う死体のニオイ。そのままベッドに戻り蹲りながらTシャツについた死体の臭いを嗅いでいると紅潮し気が紛れるような気がした。

ふと机の上に置いていたココアボールが視線に入った。箱に描かれている変な鳥を見つめているといつの間にか涙が溢れていた。

安らげる人

志紀さんが住む町は車で一時間ほど走ったところにある住宅街が立ち並ぶ穏やかな町だった。
彼が暮らしているというマンションに案内されると僕にでも分かるほど立派な建物で驚いた。地下に駐車場がありコンクリートてできた生活感の一切ないお洒落な外観。デザイナーズマンションというヤツだろうか。僕が以前暮らしていたマンションよりも遥かに家賃が高いのだろうと想像がついた。そんなマンションに彼は自然に溶けこみ、きょろきょろと見渡す僕が滑稽に思えた。
エレベーターで八階まで上り一番手前のドアに鍵を差しこんだ。そして彼は「いらっしゃい」といつもの笑顔でドアを開けた。
目に入ったのは男の家だとは思えないほど綺麗なリビング。白をメインにして不要なものが一切ない清潔感のあるモデルルームのような部屋だった。
「きれい……、ですね。」
「本当？ありがとう。じゃあ早速だけど風呂場へどうぞ。」
志紀さんは僕の肩を押し風呂場へ案内してくれた。
先週、美容院に行こうとしたときに「髪を切ってあげる」と提案されあつかましいかとも思ったが切ってもらうことにした。
彼と初めて話したときこそ印象は父に似ていてとても苦手だったが出会う度にその笑顔と優しさに惹かれ甘えてしまっている。
風呂場へ案内されると詮索するつもりはなかったが洗面台に置かれていた歯ブラシが目に入ってしまった。二本あったのだ。恋人と同棲しているのだろうか。
「さっ、座って座って。」
「はい……」
風呂場に簡易的な椅子が設置されそこに座るよう催促された。
鏡に映る僕と志紀さん。恥ずかしくなって顔が熱くなり俯いてしま

った。志紀さんの指が髪に触れ頭皮に触れ想像したとおり温かかった。
「お客さん、どんな髪型にしますか？」
「あっ……えーと……すみません。考えてませんでした。」
「そっか、じゃあこのまま短くするような感じでいいかな。」
「お願いします」
彼は「うん」と笑い慣れた手つきで髪を切り落としていった。きっと恋人の髪も切ってあげているのだろう。
しゃきしゃきと髪を切り落とす音が風呂場に響き渡り心地よかった。だけど髪がなくなっていく自分を見ているとぞっとした。伸ばしていたわけではなかったがどこか視界を覆い隠し世間から自分を遮っていたような気がする。髪を切ってしまうとずっと見ていたはずなのに鮮明に現実を見なくてはいけないような気がして少し怖くなった。
「志紀さんはご兄弟いらっしゃるんですか？」
「うん、四人！」
彼は「多いでしょ」と得意気に笑った。その困ったように笑う笑顔がたまらなく好きだった。志紀さんは家族の話しになると必ず困ったように笑う。だから僕はわざと家族の話しに触れその笑顔を強請るように見ていた。幸福が満ち溢れているようで自然と笑顔になってしまうのだ。
志紀さんの前ではじめて笑ったとき彼は本当に本当に嬉しそうに「笑った」と喜んだ。笑わないように勤めていたわけではなかったが確かに久しぶりに心から笑ったような気がした。
「兄弟ほしかったな。兄貴とか姉貴とか。弟とか妹でもいい。」
彼は僕の目をじっと見つめ「そっか」と笑った。少し驚いているようにも見えた。意外だと思われたのだろうか。
よく想像することがある。幸せな家庭。そこには母と父、そしているはずのない兄弟たちの姿。兄貴や姉貴がいたら僕の家族は何かが変わっていたような気がするのだ。家族が、いや僕が。分からない

けれど。弟や妹でもいい。弟や妹がいたら僕が守ってやるのに、なんて想像をし一瞬で冷めてしまう。
「ただいま」
「あ、帰ってきた」
「ちょっと待ってて」と志紀さんは玄関へ向かって行った。やっぱり一緒に住んでる人がいるのだ。何かを話しながらこちらへ向かって来る気配がしていた。しばらくすると志紀さんとやってきたのは綺麗な女の人だった。彼女は「こんにちは」と志紀さんと同じように屈託なく笑いかける。
「……こんにちは。梶です。」
「うん、よろしくね。志紀くんから聞いてるよ。彼すごく髪切るの上手だから。」
そう言いながら彼女は自分の短い髪に触れた。僕の髪の長さとそう変わらない彼女の髪は栗色のようなブラウンがとても似合っていた。
「あっちでコーヒー淹れて待ってるね」
そうして彼女はもう一度笑い去っていた。笑顔が、志紀さんととても似ていた。一緒にいると似てくるというがどちらが似たのだろうか。彼女も志紀さんもとても笑顔が似合う人だったのだ。
「綺麗な人……」
「ありがとう、愛(めぐみ)すごく喜ぶよ。」
「……メグミさん……あなたも」
「えっ　俺も？」
志紀さんはと照れたように笑い「ありがとう」と言った。

「さっぱりしたね。こっちのほうがいいよ、絶対。」
帰りの車中、志紀さんは赤信号で停車したあとに僕の髪を撫でた。撫でながら見るその目はとても僕を憐れんでいた。彼は時々そんな目で見つめることがある。居心地が悪いわけではなかったがどうしてそんな悲しい目にさせているのかが分からなかった。父親がいないこと？暴力のこと？それとも両方なのだろうか。

志紀さんを見つめていると突然のクラクションの音に驚いた。信号を見ると青に変わっていて前にいた車は遥か先を走っていた。志紀さんは慌てる様子もなくゆっくりと車を発進させ「ごめん」と小さくつぶやいた。
「……あの、ずっと気になってたことがあって。」
「なに？」
「二ヵ月前から起こっている事件の被害者……　どうして同一人物の犯行だってわかるんですか？」
「……あまり詳しいことは言えないけど殺人犯ってあまり殺し方を変えないんだよ」
「そう、なんですか。」
「それと傷口を調べたら同じ凶器で刺されたものだと分かったんだ」
「……」
「どうかした？」
「あっ、いえ。まだ捕まらないのかなって思っただけです。」
「そうだね……、ごめん。」
「いえ、そんなつもりじゃ……」
心臓がどきどきと早く脈打っていた。
警察は、志紀さんは三人目の被害者のことをまだ知らないのだ。本当に三人目の被害者なのか確信はなかったが殺人が起こっているのは確かだ。言ったほうがいいのは分かっている。だけど唇がからからに乾いて開かなかった。
「また遊びにおいで」
「え？」
「梶くんが嫌じゃなければ」
優しさが降り注ぐ。これでもかってくらいに。こんな僕にはもったいなくて涙が溢れだしそうになるのをぐっと堪えた。
「……はい」

9月1日

夢の中、階段を上っている途中ふと上を見あげた。そこには空なんていうものはなく天井というものもない。円形で出来ている真っ黒な壁に囲まれ海の中から見上げた水面のような虚ろなものが広がっていた。ここは水槽の中なのだろうか？いや、あたりは真っ暗だが魚が泳いでいる気配はないし第一息もちゃんとできている。体も地上にいるときのように軽い。水面の上には月のような光が浮かび上がっている。この階段の果てには外へ出られるのだろうか。分からない。だから上りつづけなければ。上らなければ。

「梶くんに会えなくて寂しかったよ～」

ナガクラが言うと他のクラスメートたちもつづけて同じようなことを言った。バカみたいなヤツらだ。いや、今までもバカなヤツらだったが以前よりも腹立たしく苛立った。にやにやと下品に笑う顔、声。全てが憎く思えた。そういう気持ちが次から次へと溢れ出るようで止まらなかった。睨んでいるとナガクラに「生意気だ」と髪を鷲掴みにされた。すると突然。二度目の突然がやってきたのだ。

———殴っていた。

ナガクラ目がけて胸倉を掴み押し倒した。そして馬乗りになって力いっぱい何度も何度も殴った。教室には僕たち以外誰もいない。クラスメートたちはナガクラを助けようと必死に僕を引き離そうとしていたが負けじとしがみ付き夢中でナガクラを殴った。殴って。殴って。殴って。殴った。

人間を殴る音、クラスメートたちの叫ぶ声。気がつけばクラスメートたちは僕を止めようとせず顔色が真っ青になって唖然としていた。ナガクラを見ると顔中から血を流している。僕の拳は皮が捲りあがり肉が見えナガクラと同じように血を流していた。はぁ。はぁ。はぁ。はぁ。自分の息遣いとセミの鳴き声しか耳に入らなかった。

「……」

拳をながめた後もう一度ナガクラに視線を移すと彼の目は腫れあが

り薄くしか開けられないのであろうその目でこちらを見ていた。
目が合いやっと自分のしたことが恐ろしくなった。急いで立ちあがり教室を飛び出した。痛い。痛い。痛い。痛い。手が焼けるように痛かった。走りながら思い出していた。志紀さんとメグミさんの笑顔を。必死に思い出さなければ何かが壊れてしまうような気がした。走って走って走って雑木林がある道を横切り住宅街を抜け駅前にたどり着いて、足を止めた。体全体で息をしていて呼吸を整えようと大きく何度も溜息をついた。
すると足に違和感を覚えふと足下をみるとマキが鳴きながら僕の足にすり寄って来ていた。
「……」
その場にしゃがみこみマキの背中を撫でる。
撫でていると手が小刻みに震えだしていた。その震えは止まらず猫の首にゆっくりと手を回している。その様子を他人事のようにながめている自分がいるのだ。
猫は警戒心なんてものはなくごろごろと喉を鳴らし幸せそうにしていた。
そして自分でも驚くくらいの力をその手に籠めた。猫は苦しそうな声で鳴き僕の手から逃れようともがき歯を剥き出し爪を立てコンクリートを力いっぱい引っ掻いている。このまま力を入れつづけると確実に死んでしまう。マキが死んでしまう。志紀さんが悲しんでしまう。だけど僕の力が緩むことはなく首を絞めつづけていた。死んでしまう。死んでしまう。死んでしまう。頭のなかに志紀さんの笑顔を思い浮かべても猫が鳴きつづける声は止まなかった。

殺したい

自分が異常だということに気づいていたが気づかないふりをしていた。今まで興味があるだけで行動が伴わなかったからだ。高校生によくある”死にたい”と駆られるような、そんなものだと思っていた。

ナガクラを一方的に殴り申し訳ないという気持ちなんてなかった。猫を殺し可哀想なんて気持ちもちっともない。ただ自分のしたことが恐ろしくなって布団に潜り震えた。ふつふつと自分のなかに育つ得たいの知れない気持ち、いや。以前からすくすくと育っていた気持ちを抑えようとしか思えなかった。

マキだった猫をどうすればいいのか分からず抱いたまま家へ帰りタオルに包んでクローゼットの中に隠した。だけど隠したままにはしておけない。ベッドの中で震えながら考えていた。死体がある場所へ運ぼう。あの場所だと人間の死体さえ見つからないのだ。明日はちょうど学校が休みだ。朝早く行けば誰にも見つかることはない。

9月2日

新聞とニュースを確認したあと猫の死体をリュックに入れて家を出た。あの雑木林に行くには駅前を通るのが一番近い道のりだったが交番の前を通りたくなかった。遠回りになるが違う道から行くことにした。

今朝も夢を見た。ずっとずっと同じようなところを上り結局これは夢だから水面の上にはたどり着けないのではないだろうかと思っていた節があった。だけど最近では水面が近くなってきているような気がしていた。頂上ははもうすぐなのだろうか。疲労感があった体も今では随分とマシになっていた。

雑木林に到着すると辺りを見回してから足を踏み入れた。そして急

いで死体がある場所へ向かうと嗅いだことがないような強烈な臭いが漂ってくる。夏休みのあいだ女の人は容赦なく腐っていった。色があったものは黒くなり腹には蛆が沸いていた。
リュックから猫を取り出しタオルを取り払い死体の横にそっと置いた。猫はぐったりとした形で硬直していた。頭を撫でるといつもの温かさはなく毛がついた硬い人形を撫でているような感触だった。撫でつづけていると志紀さんの笑顔がちらつく。それを払拭しようと頭を振り立ち上がった。死体を後にして雑木林を抜けようと歩きだす。出て行くときも慎重に辺りを見回し確認してから出て行くよう心がけていたが頭のなかは志紀さんでいっぱいになっていていつものように警戒心を張り巡らすことができなかった。すると雑木林を出た瞬間に「梶くん」と呼びとめられ心臓が跳ね上がった。
「……こんなところで何してるの」
ゆっくりと振り向くと小川が不思議そうにこちらを見ていた。雑木林に目をやりながら僕に近づいてくると彼女は心配そうに「平気？」と尋ねた。
「……何が」
「すごく……　疲れてるように見える。顔が真っ青。」
「あ、ああ……。昨日飼ってる猫がいなくなって眠れなくてさ。」
「探してるの？手伝おうか？」
「大丈夫、いつものことだし。もう帰るとこ。」
ともかくこの場所から離れようと「じゃあ」と去ろうとしたが腕を掴まれ制止された。
「……少し、話したいんだ……時間ある？」
小川ははじめて話したときのように思いつめた表情をしていた。断る理由も思いつかなかったし僕が去ったあと雑木林に入られることを恐れつき合うことにした。
以前と同じ喫茶店に入り同じアイスコーヒーを頼んだ。小川はアイスコーヒーが運ばれてくるまで一言も口を開かず俯いたままだった。

アイスコーヒーが入ったグラスが運ばれてくると彼女はグラスを鷲掴みにし一点を見つめたまま話しはじめた。
「あたしが繭に無視されてるのはね男好きだからなんだって」
小川はちらっと顔色を窺うように僕を見たがすぐに目を伏せコーヒーを見つめつづけた。そして小さく「そんなつもり全然ないのにね」と笑った。
「このあいだお母さんに言ったんだ。繭に無視さてクラスの皆からも無視されてるって……　学校行きたくないんだって。」
「……」
「そしたら、そんな小さな世界のこと気にするなだって。……そうだよね、そうなんだよね。」
彼女は吹っ切れたように言うが、泣いていた。一粒だって涙は見せないし表情も笑っていたが僕には泣いているように見えた。人は涙を流さなくても泣けるのだ。
大人は学校のことを”小さな世界”だと言う。手首を切ったとき僕の母もそう言った。だけど僕たちにとってその小さな世界が世界の全てなのだ。逃げるところなんてない。助けを求めるところなんてない。自分でどうにかする大きな力もない。ただその世界に流されるだけなのだ。
彼女は別れ際、自分の話しをつづけるよう「あのね」と僕を呼び止めた。振り向くと夕日で小川の表情は見えなかった。
「繭があたしを男好きなんて言ったのはあたしが梶くんのことを見すぎなんだって」
「……そうなのか？」
「……あのときはそんなはずないって思ってた。けど、今はそうかもって思える。」
そう言って小川は走り去って行った。表情は見えなかったが笑っているよう思えた。僕は小川の姿が見えなくなるまでながめつづけた。
小川のことで交番の存在をすっかり忘れてしまい駅前を通り交番が

目に入ったときには自分が情けなく感じた。できるだけ姿を隠そうと暗い場所を通ったが交番にはあの冷たい目をした男の姿しかなかった。今までもそういうことはたまにあったので普段なら気にも留めなかったが猫のことがあり少し心配になった。通りすぎようと歩みを速めたが交番へ足を向けた。志紀さんが猫を探していたらどんな言い訳をしようだとか知らないふりをしようだとか考えていたわけではなかったがもしも探しているのならば、と思うと居た堪れなくなった。

「あの、すみません……」

交番の扉を開け机に向かって何かを書いている冷たい目の男に声を掛けると彼は笑うことなく「ああ」と僕を知っているというような顔をした。

「志紀さんならいないよ」

「……どうして？」

彼は煩わしい、と言うように大きく溜息をつき「あのさ」と切り出した。

「用もないのに交番を出入りするのはよくないの分からないかな？」

「……」

「それに。彼、優しいから何も言わないけどああ見えて忙しいの。」

「……すみません……」

冷たい目をした男は見た目通りの人間で癪に障ったが一応謝罪をし扉を閉めようとすると彼は追い打ちをかけるかのように「それと」と話しをつづけた。聞く必要もなかったが志紀さんのことを教えてくれるかもしれない、という僅かな思いで耳を傾けた。

「君プライベートでも世話になっているようだけど、そういうのもやめなよ。彼、結婚するようだし。邪魔したくないでしょ？」

「……失礼します」

はじめて冷たい目の男を見かけたときは志紀さんと同い年くらいだと思っていたが話してみるとどうやら志紀さんよりも大分年下ように思えた。大人だというのにバカみたいな話し方をし制服を着崩し

ていた。腹が立ったがそんなことはどうでもよかった。志紀さんはあの男が言っていたように忙しい人だとは招致しているが猫を探していないだろうか、……というのはこじつけだ。なんだか志紀さんに会いたかった。困ったように笑う笑顔が見たかった。

9月3日

学校へ登校すると教室がいつもより騒がしかった。少し不思議に思ったが僕には関係のないことだったので席に着き窓の外をながめていた。

そういえばナガクラはどうなったのだろうか。気になり姿を探すと一番後ろの席でクラスメートたちと話している姿があった。目は相変わらず腫れあがり数ヵ所に絆創膏を貼っていたが大きな怪我はしていないように見え少しほっとした。

窓に視線を戻そうとすると担任の先生が教室にやってきた。いつもなら始業のチャイムがならなければやってこないので生徒はおしゃべりをつづけていた。担任は教卓に立つと静かな声で「座って」とつぶやくように言った。先生は生徒たちが席に着くまで待ちしばらくしてから口を開いた。「知っている人もいるかもしれませんが、」そこで担任は息を飲み「小川さんが亡くなりました」と早口で言いきった。静まり返っていた教室は驚くような声や悲鳴のような声で一瞬で騒がしくなった。泣き崩れてしまう女子までいた。

僕は、全身からどっと汗が流れ落ちていた。亡くなった。死んだと先生は言ったのか。いや。いや。いや。いや。いや。冷静を保たなくてはと必死に呼吸をしようと心がけたが上手く息ができない。

「昨日の夜、自宅で亡くなったので事件とは一切無関係です。安心して下さい。」

”安心”という言葉を先生は使ったが果たしてどれくらいのクラスメートたちに安心を与えられただろうか。

「先生、小川さんは自殺ということですか？」

勇気ある男子生徒はたぶんクラスメートが全員聞きたかったであろう質問をした。
「そのようです。遺書がなかったので原因を究明しています。もしかしたら、でもいいので何か知っている人がいたら教えて下さい。お願いします。」
そう言うと担任は逃げるように教室を後にした。教室はざわざわと耳が痛いうるさく騒がしかった。
自殺。自殺ということは理由は明確ではないか。小川ははじめから僕に言っていた。死にたい、と。そうか。そうか。そうか。ゆっくりと僕の隣の席の女子を見ると彼女は口元を押さえ涙を流していた。体は音が鳴りそうなほど震えている。僕の口角は上がっていく。なんて。なんて。なんて。なんて。拳をぎゅっと握りしめた。
「なぁ……」
隣にいる女子に向かって話しかける。会話なんて今まで一度だって話したことなんてなかったがどうしても彼女に聞いてみたかった。
「お前なんじゃないのか？」
彼女は恐れるように目を見開き僕を見つめていた。涙を流している。この涙は、申し訳ないとか謝罪のものではなかった。これは、恐怖。恐怖だ。笑ってしまいになりそうになるのを堪えた。
「お前だろ？なぁ……」
教室は静まり返りクラスメートは僕たちを見ていた。だけど僕には自分の唇を止めることができずマユという女に詰め寄った。
「お前すご」
「梶っ！！」
突然ナガクラが立ち上がり今まで見たことのない怒りの表情をして僕に向かってやってきた。殴られる、と思った。だけど僕には恐怖なんてなかった。胸倉を掴まれ教室が悲鳴のようなものをあげて、そこで意識は飛んだ。暗い。暗い。暗い闇の中。呑まれていく。意識が遠くなっていく。やはり恐怖はなかった。
マユという女に僕は聞きたかった。ナガクラに殴られて口を噤む形

となってしまったが今から思えばそのほうがよかったかもしれない。

———なぁ、お前すごいじゃないか。人を殺したんだよ。人の一生を終わらせたんだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3520x/

溺れる、連鎖

2011年12月11日01時51分発行